



128号

2007/ 11 / 1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



アルゼンチン名物アサード(牛肉の炭火焼き)、熱いうちにどうぞ! アルゼンチン 2007年正月 嘉陽ひろこ

‘わんりい’128号の主な目次

北京雑感その(19)「北京の甘栗」……………	2
私の調べた四字熟語(17)「背水之陣」……………	3
アルゼンチン(3)・エビータ、目指した世界の光と影…	4
中国を読む(46)「楊貴妃伝」……………	5
松本杏花さんの俳句集「余情残心」より……………	5
日月山荘のおかみさん……………	6
私の四川省一人旅(10)(稻城5)……………	8
山道を辿って……………	10
スリランカ紹介(13)「バス旅行-前編」……………	12
ラオス・シヴィライ村の女性達のハンディクラフト…	13
‘わんりい’15周年記念演奏会・曲目紹介ほか……………	14
‘わんりい’15周年記念演奏会・演奏楽器紹介……………	16
‘わんりい’掲示板……………	extra

♪「中国語で歌おう!会」11月はお休みです♪

於:まちだ中央公民館7F・第一音楽室

JR横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、
小田急線南口徒歩5分町田東急裏109ファッションビル7F

次回:12月14日(金) 19:00~20:30

指導:趙鳳葵 録音機をお持ち下さい。

●「中国で歌おう!会」参加者募集中!どなたもお気軽に参加下さい。

●「中国で歌おう!会」於:まちだ中央公民館

毎月1回、主として第3金曜日開催(変更あります)

19:00~20:30 会費(月1回):1,500円 体験無料

*初めてご参加の方は、会場、日時など‘わんりい’事務局へお問合せ下さい。

◆‘わんりい’15周年記念コンサートでお会いしましょう!!

(於:町田市民フォーラム11月30日19:00開演)

中国から輸入された栗は、日本各地で甘栗として加工され販売される時、“天津甘栗”と称していますが、これは、皆様ご承知のように、中国の栗の集散地が天津だからで、天津が栗の主産地というわけではありません。では、本当の産地がどこでしょうか？“北の方の山地ならどこでも出来る”というのが正解でしょうが、こと北京の甘栗に関しては、“怀柔県の栗が最高”というのが正解です。

怀柔県は、北京市の最北部で、河北省に突き出た所です。県の中心部は一番南にあり、皆様ご存知の慕田峪長城は、そこから少し北ですが、まだ県南部です。怀柔県は、それからずっと北に伸びています。つまり、怀柔県の四分の三は長城の外側にひろがっているのです。いかにも栗が沢山採れそうな土地柄です。

今年の甘栗の価格は、1斤(500g)8～9元(1元≒16円)が相場ですが、“怀柔の栗”と言うだけで1斤10元です。勿論、10元で買っても虫食いが多かったり、美味しくなかったりするかと思えば、8元で買ったクリが、ちょっと小粒だけれど美味しかったりと、色々で、美味しいクリに中るのはなかなか難しいものです。因みに、日本では、小粒でも美味しい栗は評価されますが、北京では小粒はあまり評価されません。

美味しい栗になかなか中らないので、中国の友人に、どうやって美味しい栗を見分けるのか聞いたところ、友人は、“その場所で焼いていて、買う人が並んでいる所が美味しい栗を売る所”と言います。このご尤もな意見に従って、バスで外出した時は、必ず窓の外を眺めて、人の行列や栗の看板を探しましたが、なかなか見当たりません。何日かきょろきょろしているうちに、段々思いついてきました。以前、118のトロリーに乗っている時、“あそこの栗は美味しいよ”と教えてもらった事がありました。それで、気をつけて見ていると、ありました。大きな看板に“秋”と“栗”の字が鮮やかに描かれています。“これだ！”と思って看板の下をみると、人が沢山並んでいました。この店に間違いありません。バスは東から西に走っていて、バス停を出てすぐにありましたから、次のバス停に気をつけていると、「北海公園北門」と言いました。家に帰って調べてみると、最寄のバス停は「地安門路口東」で、お店は、地安門大街の南西の角にあるのでした。

この道は何度も通っていたのですが、あの看板にも人の行列にも気が付きませんでした。あの看板は真新しいものでしたから、最近、栗の季節になってから書き換えたものだろうと想像しています。前にはどんな看板がか

かっていたのか覚えがありませんが、栗がなければ人の行列もないので、目立たないお店だったのでしょうか。栗のないときは何を売っているのでしょうか、それも気になりました。

何はともあれ、翌日早速、栗を買いに出かけました。朝から小雨が降っていて、お店に着いたのは11時半頃でしたが、20人近くの人が並んでいましたので、列の後ろに着きながらお店を観察しました。お店は歩道から一段上がっていて、窓口を設けてあるだけで、店の中には入れません。買う人の行列は、この窓口の前に横一列に並んでいるのです。窓から中を覗けますが、列の後ろの方から見えるところでは、ポップコーンを作っていました。出来上がったポップコーンに、マジパンのような、熱で溶けるものを塗って色を着けていました。ポップコーンの欲しい人は、勿論、この辺りで買うことが出来ます。列が少し進むと、そこは各種瓜子儿や、胡桃、落花生等いわゆるナッツ類を売っていました。推量するに、栗のない季節には、これらの品物がメインの商品なのでしょう。

物珍しさにキョロキョロしていると、行列の進みが思いのほか速く、15分ほどで栗の窓口には到達しました。販売員の後ろで、大きな中華なべのような容器が4つつ並んで、盛んに栗を焼いています。作り方は日本と殆ど同じで、小さな石と栗が混ざって、お鍋の中でぐるぐる回って、良い匂いを発散していました。沢山焼いていましたが、売る窓口は一つで、独りの販売員が、次々と注文を聞いて計って紙の袋に入れます。栗が熱いので袋の口は閉めずに渡します。貰ってすぐ食べ始める人がいるかと思えば、紙袋を4～5個ビニールの袋に入れて持ち帰る人もいます。並んでやっと買った、暖かい栗に、みんな幸せそうな顔をしています。

私も、念願の「焼きたての栗」をやっと手に入れた時、小雨はもう止んでいて、気持ちも晴れ晴れしてきました。この後、私は栗を抱えたまま、118で平安里まで戻り、新街口北の徐悲鴻記念館に行きました。徐悲鴻の絵も素敵でしたけれど、今日は、芸術の秋より味覚の秋のご紹介をする積りですから、ここは割愛します。

新街口大街を北上するバスの中から、2軒の栗屋さんを発見しました。今まで見つからなかったのに、見つかりましたら次々と目に付きだしたから不思議です。でもこれは、どうやら、地域的に偏りがあるせいではないかと思えます。やはり、甘栗屋さんは、古い町並みに似合います。

今日の栗は、柔らかくて、甘くて、虫食いは無くて、文句なしに美味しく頂きました。

今年9月、安倍内閣総辞職の後を受けた福田内閣誕生の折、福田総理は就任挨拶の中で「今度の内閣は“背水の陣内閣”であります」と述べました。7月末の参議院選挙で、参議院は与野党の議員数が逆転し、自民党が与党であり続けるためにはこれ以上国民の信頼を失うようなことがあってはならないぎりぎりのところにいるという自覚を”背水の陣内閣”というような表現で表したのでしょう。

またスポーツなどで、大事な試合を前回落としてしまったときなど、「今回は背水の陣を敷いた気持ちで試合にのぞみます」などと言ったりします。

背水の陣は身近な言葉としていろんな場面で使われています。

辞書を引いてみますと、それぞれ次のように載っています。

▶三省堂「現代国語辞典」:

「背水の陣：必死の覚悟で戦う（事にあたる）こと。「背水の陣をしく」

▶小学館「中日辞典」:

背水一战 背水の陣を敷いて一戦を交える。一か八かの決戦をする。

出典は 史記（淮陰侯列伝）です。

漢の国が、天下統一を果たそうとしていたとき、最後に立ち上がったのは、趙の大軍でした。漢の名将韓信は、漢王（劉邦）に兵を授けられ、魏を討ったあと趙を攻撃するために河北省“井陘口”に兵を集めようとしていました。これを防ごうとする趙軍20万に対し、韓信の漢軍はわずか3万にすぎませんでした。

韓信は、井陘口の手前で軽騎兵2千人に漢の赤い幟を持たせ、「趙軍は、我が軍が逃げるのを見ると、必ず城を空にして追撃してくるだろう。その時諸君は、趙の城に入り、趙の幟を抜いて、我が軍の赤い幟を立てよ。」と命令しました。また一方、1万人の兵に川を背にして陣取らせました。（背水の陣）

昔から、川や絶壁を後ろにして陣地をとることは、敵が正面から攻めてきたとき窮屈になるので

絶対にしてはいけない戦法である、と言われてきたので、趙軍は「川を背にして陣地をとるとは、韓信は兵法の初歩も知らない」とあざけり笑いました。

「夜のうちに奇襲をかけてやっつけた方がいいのではないか」という意見も出されましたが「こちらは二十万もの大軍であるし、兵法すらわかっていないやつらに奇襲など必要ないだろう。」と判断され、翌日攻め込むことになりました。

翌朝、韓信は、大将旗を掲げて太鼓を打ち鳴らして井陘口を出て、趙軍がこれを攻撃すると、予定どおり退却するふりをして、太鼓や旗を捨て、川のほとりの自軍の方に逃げました。すると、趙軍は「今が好機！」とばかりに城を空にして追撃しました。余裕のある趙の兵士達と違い、後がない漢の兵士達は、後ろが川で逃げ場がないため、皆、死にものぐるいで戦い激戦になりました。

その間に、赤い幟を持って潜んでいた漢軍の伏兵達は、趙の軍が正面から一気に攻め込んでいるすきに、からっぽになっていた趙の陣地を一気に占領して、赤い幟を掲げてしまったのです。

川を背にして後へは引けない漢軍の死にもの狂いの戦いのために、趙軍はとうとう韓信を討ち損なってしまう、諦めて城へ帰ろうとしました。ところがいつの間にか、背後にある自分の陣地に敵の幟が立ち並ぶのを見た趙軍は、「これは一大事、すでに城は漢に占領されてしまった！」と驚き慌てふためいて大混乱に陥り、ついに漢軍に挟撃されて散々にうち破られてしまいました。

勝利の戦いの後「兵法にない手段をとったのはなぜか」と尋ねられた韓信は、「確かに兵法には具体的な戦術としては書かれていないが、『軍隊は死地に陥れてこそ生きる道がある。滅びてしまう境遇に置かれてこそ存ずる道がある。』ということが書かれているので、その通りにしたまてだ。」と答えました。

追い込まれて真剣になったときの人々の強さを利用したのでした。

【私が調べた四字熟語 17】
背水之陣(はいすいのじん)
三澤 統

エビータ、目指した世界の光と影

(アルゼンチン 3)

嘉陽ひろこ

アルゼンチンへ旅行したことをきっかけに、知らない世界をほんの少し垣間見ることができた。専門的に研究・学習した方からはお叱りを受けるかも・・・と思いながら私なりのエビータ像を書いてみたい。

マリア・エバ・ペロンはエビータの愛称で親しまれ、一時期はアルゼンチンの聖母として絶大な人気を得た女性だ。エビータは1919年、ブエノス・アイレス州の寒村に父のいない子として生まれ、不遇の少女時代を送ったという。女優を目指し、ブエノス・アイレス市に移るもラジオ番組や映画での端役に留まっていた。

1932年にフスト政権が成立して以来、保守支配が続いていたアルゼンチンでは、43年、軍部がクーデターを起こし政権を把握、このクーデターを主導したのは、後の大統領で、エビータを二度目の妻とするファン・ドミンゴ・ペロン大佐であった。陸軍次官と国家労働局長を兼務するが、しかし、文民派の協力を得ぬままの軍事政権は国民の支持を得る必要にせまられ、労働者への保護政策を次々に打ち出し、大衆の幅広い支持を得た。ペロンはこの指示をバックに軍事政府随一の実力者にのし上がっていった。ペロンと労働運動のリーダーを結びつけることに一役買ったエビータは、ペロンとの“恋”も成就するに至ったのだ。

しかし、45年10月、彼の労働者寄りの政策に軍内部の反ペロン派によって失脚、幽閉される。同月17日、労働者は大規模な抗議デモを組織してペロンの釈放を勝ち取る。この頃から、ペロンは、エビータに感化されていったように思われる。ムッソリーニを信奉していた軍人の彼が、労働者のアイドルとなったのだ。46年、大統領選で圧勝、社会正義(労働者保護)・経済的自立(工業化と国有化)・自主外交(米・ソのどちらにも属しない)を柱に独自の改革を推進していった。

大統領夫人となったエビータは自ら主宰した慈善組織エバ・ペロン財団で活発な救貧活動(貧民街の改善、老人・孤児対策)を展開し、社会政策の一端を

担った。彼女の美貌も大衆に“聖母”として崇拝される理由の一つだ。52年7月、33歳で病死(白血病)した彼女のドラマチックな生涯は、96年、マドンナ主演のミュージカル映画にもなり国際的に知られるようになった。マドンナの映画は、“本当に彼女は聖母だったの?”と問いかけながらエピソードを語るのだが結論は、当然肯定だ。スペイン語でのマドンナ主演は難しかったのか、アルゼンチンではなく別の国の話のようだった。

さて、夫のペロンだが、51年、再選されるも経済政策で行き詰まり、翌年のエビータの死により、大衆間の人気は下落、55年、軍のクーデタにあって失脚する。紆余曲折の末、73年、大統領に帰り咲くがしかし、インフレやテロに苦しむ祖国の救済政策を打ち出せぬまま、74年、心臓病で急逝した。

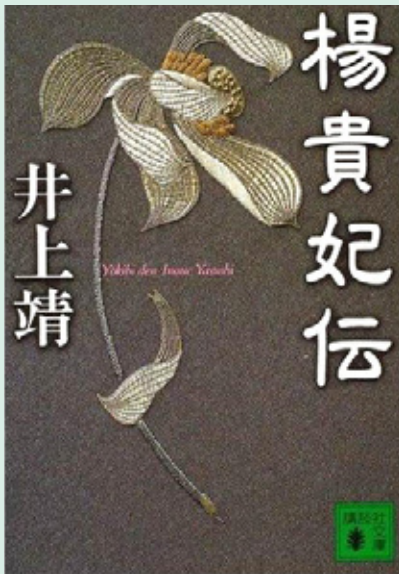
76年、ビデラの軍事政権によって都市ゲリラとペロニスト(ペロンを支持した労働者党)への大弾圧が始まる。3万人ともいわれる被害者の母親たちが、今日も5月広場に集まり、人権抑圧を訴えている。

エビータの博物館へ行った。かつて女性と子どものために福祉住宅として使われたというこの建物は現在、国の歴史記念物に指定されているそうだ。静かなこじんまりした館内には彼女の生きた証が語られる。映画出演したワンショット、写真よりも小柄と思える服の数々。熱狂的に国民から迎えられる映像や写真。国葬だろう、黒衣の人々が泣いている。1950年、第二次大戦の日本の食糧難にいち早く小麦や衣類を送ったエバ・ペロン財団。権力者の妻となったエビータが、貧困と弱者救済の先に目指したモノは果たして・・・。

エビータが活躍するその同時代、ラテンアメリカが生んだ革命家、アルゼンチン人特有の口癖から“チェ”の愛称で呼ばれた男“ゲバラ”はブエノスアイレス大学医学部を1953年に卒業するのであった。

■参考文献：

増田義郎編：「ラテン・アメリカ史」 山川出版社、2000年
染田秀藤編：「ラテンアメリカ：自立への道」 世界史思想社 1993年
大貫良夫・落合一泰・国本伊代・福嶋正徳・松下洋監修：「ラテンアメリカを知る辞典」 平凡社、1987年



シェイクスピアの「オセロー」を観た。前半の高潔なオセローは後半では嫉妬に狂う暴力オヤジへと変わっていく。裏舞台を知っている観客は、オセローを滑稽に感じるけれど、恋にしろ何にしろのめり込んでしまった

人間は、時に常識では考えられない回路へ突っ走ってしまうもの。周囲の人には、どんなに滑稽に映ったとしても。

玄宗皇帝がしかり、とは言いきれないが、おそらく幸せな権力者だったのだろう。彼が28歳で即位してから、「食物は満ち溢れ、治安はよく保たれ、民は生業に安んじ、民心は安定し、天災地異もなく、人情風俗ともに誠を失うことなくして篤い太平の時代であったのである」と井上靖は書いている(柔らかい漢文調の文章で、うっとりしてしまったので、そのまま

引用しました)。逆境によって権力者の力が磨かれるとしたら、玄宗はそれをする機会も必要もなかった。平和な時代に、美しい楊貴妃を傍へ置き、日々を幸せに暮らすうちに、感覚が鈍くなり、安祿山の野望を見抜けなかったとしても、なんら不思議はない。楊貴妃が舅である玄宗に召されたのは、彼女が22歳のときだった。そして最期を迎えるまでの16年間、一人の美しい女性でしかなかった彼女が、権力者を手の平で転がしはじめ、道具として利用するほどの力を持つようになる。楊貴妃と、彼女を利用して政治を操る裏幕たちと、彼らにとって玄宗皇帝は「己が運命を切り拓くための獲物に他ならなかった」と井上靖は書く。そして、権力への欲望で輝く楊貴妃の悲劇的な最期を、「安祿山が叛したお陰で、武后にも、韋氏にも、太平公主にもなることなく、国に殉ずる形でその三十八年の生涯を終えることができたのである」と安堵で締めくくる。武后も、韋氏も、太平公主も、天下の権を握るため人殺しを厭わなかった女性たちだ。

のめり込んでしまうと周囲が見えなくなるのはよくあること。けれど恐ろしいことに、逆に、周囲からはその愚かさが目立ってしまう。それで、殺されるのはつまらない。けれど、愚かなほどのめり込むものがなく生きるのも、つまらない…かもしれない。(真仲智子)

松本杏花さんの俳句「余情残心」より

村の子のもの売る声や秋陰り

xiāngcūn jī tóngzhì
乡村儿童稚

jiàomài shēngshēng qíng chì chì
叫卖声声情炽炽

lǜféi hóng shòu shí
绿肥红瘦时

季语：绿肥红瘦时，秋。日语“秋阴”意为秋天枝繁叶肥，浓绿成荫，此处为意译。

赏析：译此句时，笔者脑中首先浮现出了我国美术大师李可染的牧牛图，只是此句画面中的小童不是骑牛吹笛，而是提篮小卖。构成悠然消遥因素的，是表现绿肥红瘦的浓墨。也许我们是从观赏者的角度去审美，但若设身处地换位思考，那些孩子未必如我们想像的那么悠然。震颤心灵的，是大自然的造化，及其衍生的纯朴美。

遠棚田軒に吊るした唐辛子

yáoyáo wàng tītián
遥遥望梯田

yán xià diào mǎn làjiāo gān
檐下吊满辣椒干

chuànchuàn hóng dāndān
串串红丹丹

季语：辣椒，秋。

赏析：远望山峦有梯田，近看檐下辣椒干，这是一幅立体感特强的绚丽画卷。梯田金灿灿，辣椒红艳艳，无论是层次还是色彩，都令人赏心悦目！

但愿农家的生计能像这辣椒干一样红红火火



日月山荘のおかみさん

岩田温子

日月山荘は四姑娘山域の玄関口である日隆（リーロン）にある小さなホテルの名前です。

わんりいの仲間達が四姑娘山自然保護管理局の特別顧問の大川さんのご紹介でこの地域に足を運ぶようになってから3年、毎回このホテルに泊まるのでよくご存知の方も少なくないと思います。今年の8月にはフラワーウォッチングと大姑娘山登山を目的に私を含めた9人が訪れ、宿泊しました。

日月山荘の2階、食堂に当てられた部屋の前に中庭のような空間があります。食事時間が近くなった私たちはその中庭でぶらぶらし、周りの建物の様子を見回しながら食事を待っていました。すると、中庭の奥まったところの壁際に据え付けられた棚の上に、なにやら茶色い、毛のようなものが籠に入れられておかれているのに気がつきました。近寄ってみると、やはり動物の毛です。そのとき通りかかったおかみさん（サスマンさん）に「ヤクの毛ですか？」と聞いてみると、そのとおりでした。

おかみさんは私たちがヤクの毛を興味深そうにしげしげと見ていると、近寄ってきて、ヤクの毛を取り、身振り手振りを交え「硬い毛は敷物に、柔らかい毛は衣服用にする」と教えてくれました（写真1）。毛の入った籠

の側には敷物用と思われる、ごわごわした手触りのこげ茶色の織布が畳んでおいてありました。毛は細い竹を裂いて編んだ籠状の容器に入れ、そこから少しずつ引っ張り出しながら、糸に紡いで紡垂車に巻きつけます（写真2）。

私たちが道具や敷物に触れながらますます興味深そう

うにしていると、わざわざ家の中からヤクの毛織布で仕立てた服を取り出してきて見せてくれました。それはご主人とおかみさんのハレの日に着るための服だそうで、おかみさんが織り、仕立てたものだそうです。金や銀のラメの入った飾り布が襟から裾、袖口に縫い付けられた、たっぷりとした立派な服です（写真3, 4）。色はやはりこげ茶で、さすがに敷物用よりは織り目が細かくて、しっかりと織られていましたが、結構重たく、手触りも少しチクチクしていました。

さらにおかみさんは部屋の中からまだハサミを入れていない布地を出してきて、「これで息子達の晴れ着を作るのだ」と話してくれました。そのときのおかみさんの誇らしげな顔。自分のやっていることに確かな自信を持っている美しい笑顔でした。織機も出してきてくれたのですが、忙しいらしく、広げて見せてもらうことは出来ませんでした（写真5）。

ヤクはチベット高原に生息している牛の仲間です。長く、ふさふさした毛を持っています。かつてはその丈夫な毛で衣類、敷物、穀物保存用の袋、物資運搬用の袋などおよそ生活に必要な繊維製品を作っていたのですが、今はあらゆる面で便利な化学繊維製品が好まれ



写真 1



写真 2

るようになって、もうヤクの毛を刈り取って、糸に紡ぎ、織って、仕立てるとい人はすくなくなりました。日月山荘の近くに住んでいるおばあさんが家の前でヤクの毛を紡いでいましたが、そのおばあさんも「若い人たちはもうやらない。私みたいな年寄りばかりよ」と寂しそうに言っていました。



写真 3



写真 4

日月山荘のおかみさんの年齢は恐らく40代

前半ではないかと想像しています。毛は買い入れたと言っていたが、家事の他に、ホテルや土産物屋の仕事などで忙しいであろう人が、わざわざ毛を買って、手のかかる仕事をしていることに、そしてその仕事を大切な誇らしいこととして考えていることに、私はとても感動をしました。

おかみさんの長男(明銘さん)は、私たちの登山ガイドをしてくれた青年で、今年の9月から日本の大学へ4年間の留学をするために来日をしました。次男は流暢な英語を話していましたから、いつかは英語圏へ留学を考えているのかもしれませんが。この青年達が普段どんな服を着て、どんな暮らし方をするとしても、ハレの日にはお母さんの、まさに手づくりの、少々重たい、少々チクチクする晴れ着を誇りを持って着てくれたらと願わずに入られませんでした。

* 写真撮影は奥村千恵子さん、加奈子さんによるものです。



写真 5

【‘わんりい’の原稿を募集しています】

‘わんりい’は、‘わんりい’の会員と関係者の皆さんから寄せられた原稿でまとめられています。

‘わんりい’の頭には日中の冠を載せていますが、中国に限らず各地(主としてアジア)で体験された楽しい話、見聞した面白い話、美味しくて珍しい食べ物の話などなど、気楽にお寄せいただいているいろいろな角度から諸国の文化に触れてみたいと思います。

紙面が16Pと限られていますので、掲載まで暫くお待ち頂くことがあります。また、紙面の都合で作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもありますのであらかじめご了承下さい。

尚、原稿の締め切りは20日ということにしていますが、編集の都合上、早めに頂ければ有難いです。(田井)

‘わんりい’の会員になりませんか

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催しています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行しています。

入会はいつでも歓迎しています。会費は、おたより制作費と送料及び活動のサポートに当てられています。活動の様子は、おたより又は‘わんりい’HPでご覧ください。問合せ：042-734-5100 (事務局)

人数も4人揃ったことだし、ドライバーもいる。すぐにも垂丁に出発したいところだったが、先ほどからタクシードライバーと話し込んでいたアーロンが戻ってくると、今日は警察が出ているから今から垂丁に向かうのは無理のようだと言われ、私たちに告げる。

え？やっぱり警察？

話を聞いて、やっと今朝お兄ちゃんの言っていた意味が分かってきた。結局はこういうことなのだ。

お客を乗せて垂丁に行くドライバーは、タクシードライバーとしての許可証を持っていないからならぬらしい。だが稲城で客引きをしているタクシードライバー達はほとんどがモグリの白タクだ。それを取り締まるために時折警察が出ていて、今日がその日だったという事らしかった。

なるほど現金収入になる仕事の少なそうな田舎町では、車の運転さえできれば手取り早く観光客から高めの運賃を請求する事ができるタクシードライバーは美味しい仕事に違いない。モグリでにわかタクシードライバーになる者が後を絶たないのは想像に易い事だった。そうか～、あのお兄ちゃんウソをついてた訳じゃなかったんだ。一見チンピラ風だが実は人のいい、彼のジャガイモのような顔を思い浮かべて苦笑した。

「君たちは今日どうするんだい？」アーロンが言った。「良かったらすぐ素敵な温泉があるんだ。俺たちは今日そこに泊まるつもりだが、君たちもどうだ？ そうすれば明日の朝そろって出発できるよ」これといった予定も無い私は、アーロンの言葉に異存のあるはずも無かった。

温泉!! 埃っぽい土地でせいぜいシャワーしか浴びれない毎日を過ごす日本人で、この言葉に惹かれない者はそういないんじゃないだろうか。ウィンも同様だったらしく話は即座にまとまって、私達はその場で温泉まで送ってくれるというタクシードライバーの車に乗り込んだ。すべり出しからチームワークは抜群だ。宿に寄ってもらい垂丁にもって行くザックを積み込むと、車は温泉に向かって走り出し、一寸先も読めない旅の日常はこの日も思わぬ方向に展開していったのだ。

稲城の温泉地は街中から2、3キロ離れた場所にあった。ゆるい上り坂をのぼっていくと、車は温泉街というにはあまりに素朴な建物が立ち並ぶ場所に入って行く。土で塗り固められた農家の納屋のような建物が立ち並ぶ中、車一台通るのがやっとの入り組んだ狭い道路をそろそろと進んで行く。道路脇の溝からは湯気が立ち上り、そこで洗濯している人の姿も見られた。

うわぁ～！ホントに温泉だぁ～!!

アーロン達に連れて行かれた宿は、温泉街の中でもどん詰まりの一番奥だった。道はそこで行き止まりだ。回りは低い丘に囲まれたのどかな牧草地帯が広がっている。

旅館の札にはその名も「浮世辺絶山庄」と書かれていた。素晴らしい。しかも「温泉出水第一家」だ。建物の脇に源泉が沸き出ている正真正銘の源泉館だ。更に素晴らしい。朝、あのまま垂丁に行っていたら、こんな場所の存在も知らずに通り過ぎていたんだろう。まったく何が幸いするかわからないものだ。

荷物を降ろすと、タクシードライバーは明日の朝4時に迎えに来ると約束をして帰っていった。

「你好!! また来たよ～!」

既に昨夜一泊して、宿の人達と親しくなっているアーロンと小青が中に声をかけると、チベット服姿の優しそうな老女と子供を抱いた女性がニコニコしながら出迎えてくれた。建物は農家の民宿といった趣で、二階にある客室は簡素なベッドが並んでいるだけだったが、日当たりが良く掃除が行き届いた気持ちの良い部屋だ。トイレは何処? と尋ねると、アーロンが笑いながら裏の林を指差した。

「これを全部持って行くつもり～!？」

部屋に荷物を運び込むと、三人は私の荷物の大きさをみて目を丸くしていた。

アーロンと小青はせいぜい日帰りハイキング程度の小さなザックを一つずつ持っているだけだ。ウインのザックはそれより一回りほど大きくはあるが、まだ私の半分ほどの大きさだった。

私の荷物は山の中でキャンプする事を想定して準備されていたため、歯ブラシなどの日用品の他に合羽や非常食、懐中電灯、シュラフにダウンの防寒着などでいっぱい膨らんだ大きなザックに加え、更に登山やハイキングなどの行動時に背負うための小さなザックまで別に持っていた。

「向こうにはちゃんと布団のある宿泊施設があるんだから、そんな物は必要ないよ～。垂丁に行く時にはここで不要な物を預かってもらったらいいさ」アーロン達は笑って言ったが、私は頑固に首を横に振る。

「だって、前に垂丁に行った時に必要だった物ばかりだもん!」

高山の気候は厳しいのだ。あれから三年、垂丁の状況がどのように変わっているかは知らないが、やっとの思いでここまでやって来たのに、何かが欠けた為やりたい事を諦めなければならないような事態になるのはご免だ。垂丁には万全の準備で臨みたかった。

荷物を置き宿の人に振舞われたバター茶を飲んで一息ついて、時間はまだお昼前だった。

「俺達はある山に登ってみる事にしよう。君たちも好きに過ごしてくれ」仲良く出かけて行くアーロンと小青の背中を見送ると、私とウィンも散歩に出かける事にした。知

り合ったばかりのウィンと互いに自己紹介しながら、先ほど車で上ってきた田舎道をブラブラと下る。ちょっとボーイッシュで女性というより一見少年のように見えてしまうウィンは、以前は旅行ガイドの仕事もやっていた程の旅好きで中国国内はずいぶん色々な場所を旅行しているそうだ。「中国には素晴らしい場所がいっぱいあるよ～」誇らしげに語るウィンがちょっと羨ましく思えた。

あたりの景色は、牧草地が広がり、チベット語の経文を彫り付けた岩があったり、きれいな小川が流れていたり歩くのも楽しかったが、しばらく歩くと自然の風景は途切れ、道は舗装路に変わってしまった。夜間は厚手の上着でも着ていなければいられないほど冷え込むせいで、頭上で輝く太陽はまるで真夏のようにジリジリと照りつけている。まったく高地の気候は激烈だ。

「私達どこに行くつもり？」ウィンが問いかけてくる。特に目的など無く歩いていたのだが、街に近づくにつれ私は再び稲城の街に惹きつけられていた。

昨日稲城に辿り着いてから、まだ殆ど街の様子は見ていない。このまま一本道を歩いていけば自然に稲城の街に着くはずだし、明日から数日間亜丁で山籠り(?)する事を思うと、果物や携帯食なども、少し買っておきたかった。

「私はこのまま稲城の街まで行くけど、あなたは好きにしていよ」ウィンに答えると、「じゃあ、私は辞めておく」彼女はアッサリ引き返して行った。一人旅同士の関係って楽なものだ。

ウィンと別れしばらくすると、背後からバイクの音が響いてきた。振り向くと一人のおじさんがバイクで道を下ってくる。炎天下の舗装路を歩くことに嫌気がさしていた私は、手を上げバイクを止めると街まで乗せていってくれるよう頼んでみた。おじさんは快く私をバイクの後ろに乗せてくれ、あっという間に街まで連れて行ってくれた。「お幾らですか？」念のために訊ねてみたが、おじさんは笑いながら手を振ると走り去って行った。

稲城は小さな田舎の街だ。街並みは、中心となる交差点からせいぜい一キロ四方の中にほぼ納まってしまうので、一時間も歩けば殆ど歩き終わってしまう。三年前に訪れた時には強面の男たちが闊歩する山賊の街との印象を受けた稲城だったが、稲城が変わったのか、私がここまでやって来る間にチベット族の風貌に慣れてしまったのか、今回は何という事の無い田舎町のような印象だ。

以前この土地を訪れた時、皆で二度も訪れた餃子屋があり、そこの女の子が可愛かった事や、向かいの小さな雑貨屋で買い物した事が思い出に残っていたので、探してみたが見つからなかった。三年の間に店も代替わりしてしまったのだろうか。

ブラブラ歩いていると、昨夜の上海の彼女が数人の仲間と一緒にいるのに路上で出会った。

「あら！もう昼食は食べた？良かったら一緒にどうぞ？」

いつも一人で侘しく食事している私は迷わず彼女達の

仲間になって街の食堂に入った。上海小姐の友達はまだ旅行を続けており、彼女だけ仕事の関係で先に上海に戻るのだそうで、その場にいた中国人達は旅の途中で知り合った者同士らしかった。

久しぶりに大勢で取る食事だ。たくさんのおかずを前に白いご飯を食べるのも四娘山メンバーと別れて以来だったが、それより旅ですれ違った者同士がこんな風に一緒に食事できることが楽しかった。しかも私以外は全員その場で知り合ったばかりの中国人だ。自分がこんなに自然に彼らに溶け込んでいるのが不思議だった。

楽しい食事会が終わる頃、明日康定に戻るためのバスチケットを買いに行くと出て行った上海小姐はしばらくして真っ青な顔で戻ってきた。

康定行きのバスチケットは発売と同時に完売で、あさっての便まで売り切れているのだそうだ。他にもチケットにあぶれた者が大勢いるらしく、僻地とはいえこれだけ観光客も集まる土地だというのに、稲城の交通事情はきわめて悪いようだ。「明日までに康定に戻らないと休み明けまでに仕事に戻れないわ、何とか方法がないか当てる」彼女は青い顔をして再び街に走り出していった。

いつ戻るか判らない彼女を待っていても仕方ないので、ひと時の食事会はその場で解散し、私は一人で稲城散歩を続けた。「亜丁の食事は高くて不味いのよ～」昨夜の上海小姐の言葉を思い、お湯を注ぐだけで食べられるインスタントラーメンや果物、登山には非常時のカロリー補給のため携帯必至のチョコレートや、山ではいろいろと便利で必需品のトイレトペーパーなどを買い求めた。

路上で再び上海小姐に出会ったので様子を聞くと、チケットが買えなかった者同士が集まってタクシーをチャーターし、一人200円で康定に向かう事になったそうだ。バス代に比べるとかなりの割高だが背に腹は変えられないのだろう。やはり稲城のタクシードライバーは美味しい仕事だ。

稲城の街を二周し買い物も終えたところで温泉に帰ることにした。頭上の太陽は相変わらずジリジリと照りつけている。往路のヒッチハイクに味をしめていた私は、帰りもその作戦で行こうと後ろを振り向きながら歩いた。しばらくすると客を乗せたタクシーのような車がやってきたので、手をあげると止まってくれた。

温泉まで乗せて欲しいと頼むと、運転していた若いお兄さんが乗れというゼスチャーでドアを開けてくれる。温泉の入り口まで来たところで降ろしてもらい、お金の事を尋ねたがやはり彼も手を振った。中にいた本当のお客はお金を払うのだろうから私はズルしてしまった感じだが、昨日のタクシードライバーの兄ちゃんといい、さっきのおじさんといい稲城の人たちはみんなスレてなくて親切な印象だ。

やっぱり稲城はいい街だった。

山道を辿って

lǐ qíng
李晴 (山西省太原在住)

李晴さんは、中国山西省で活躍の若い女性作家です。故郷である山西省奥地である河曲地方に住んでいた頃の思い出を題材にしています。そんなに昔ではない、中国農村部の厳しい生活を垣間見るようです。

あれは雨がよく降る季節だった。私が巡鎮中学(高等学校、日本の高校に相当)への入学通知書もらった時、巡鎮へ行く道は雨水で崩され何日も車の往来が出来なかった。8月(農曆)の村はもう充分秋の気配が深まっていた。

私は家の門のところに佇み、ぼんやりとした靄の向こうの、村の入り口へ通じる道を眺めていた。それはごくありふれた石の道で、天気の良い日には1日1回、陽方口から河曲へバスが通っていた。真っ赤な車体と真っ白な屋根はとても鮮やかで美しかった。しかし、あの雨の多かった8月はすべてが暗く、不鮮明で、気のふさがりような毎日だった。入学手続きの日からもう10日は経っていたが、どんよりと重苦しさの立ち込める空には依然として一筋の光すら見えなかった：雨、速くもなければゆっくりでもなく、ただ、ただ、降ってくる雨。ちょうど何もかも策が尽きようとしていた時、家の者が、役場から車が出て遠回りをして河曲へ行くとききつけてきた。母はすぐに私をその車に乗せて巡鎮へ行かせることにした。

私の村から巡鎮までは約100里(約50km)もあり、母は私を独りで行かせることをとても心配していた。しかしどうしようもないことだった。当時私の父は軍人として遠く離れたところにおり、祖父は生来とても内気で人と話をする事が出来ず、家から遠く離れることなど出来ることではなかった。曾祖父はといえば、頭脳明晰で実行力に富んだ人であり、若い頃には外へ出てあちこちで働いたこともあったが、もうすでに80才を越え、充分老人の域に達していた。

そんな雨の降るある日、どうやって荷物を持って役場まで行ったのかははっきりとは思い出せないが、私のやって来るのを待っていた車はすでにブルンブルンと音をたてエンジンをかけ、広く水を被っている道の端に停まっていた。今思い起こしてみると、あの時曾祖父がずっと私を役場まで送ってきてくれていたのだった。私が車に乗り込むとき曾祖父は「雲雲(私の幼名:彩雲)、姥姥(ラオラオ)はここまでしか送らないが、大丈夫だな、ん?」と私に切々と話し掛けた。曾祖父のことを私は土地の習

慣から姥姥と呼んでいたのだ。

曾祖父は車の周りを往ったり来たりしながら運転手と世間話をしていた。私が巡鎮へ行くということを聞いた運転手は驚いて「この車は巡鎮へは行かないよ、途中で河曲へまがるんだ」と言った。それを聞いた途端私はぼう然とし、ただ足下の大きな荷物を見つめるばかりだった。曾祖父は素早くさっと車に乗り込み運転手に向かって言った：「少しでも行ければそれでいいよ、曲がるところに来たら車を降りる。残りの10里や20里なんて歩いてもたいしたことはないさ」。そうして曾祖父は私の側に来て腰を下ろした。

車が動き出した時、雨はまだ降っていた。斜めに降ってくる雨の糸は車の窓ガラスの上を音もなく軽く叩いていた。曾祖父と一緒に来てくれることになり、私は密かにホッとした。父が軍役で家を空けてから10数年、日頃母は私を可愛がり大切にしてくれたが、しかし時には年の若い母にとって思うようには事が行かないこともあった。

とりわけ私が小学校に上がったはじめの2年は毎日送り迎えの人間が必要だった。母は病気がちで、おまけに幼い妹もいたため、私を送り迎え出来るのは曾祖父しかいなかった。夏の真昼、外は焼けるような暑い陽射しの頃、ひんやりと涼しいオンドルの上でぐっすりと昼寝をしていると、ジューッと学校から授業開始の予鈴が聞こえてくる。私はコロコロッとオンドルの上を転がり、起き上がり、泣き始める。遅刻をするのではないかとビクビクし、泣きながら学校へ走って行ったものだった。よく靴が脱げ、手にぶら下げて裸足で学校へ行った。

私はまたとても怖がりだったので、分かれ道や、軒の下、樹の根元などにはいつも何かが潜んでいるのではないかと思っていた。ひたすらまっすぐ、頭を下げ、振り返りもせず一気に学校へと走ってゆき、校門にある大きな榆の木の下に着くと、やっと後ろを振り返ってみることが出来た。そしていつも曾祖父の見慣れた小さな体が、私の後ろのそう遠くない所でゆっくりと揺れ動いているのが見えたのだった。明らかに私を送ってきてくれたのだが、曾祖父はまるで関係なくブラブラ歩きをしているように振舞っていた。そんな曾祖父の様子を見かけると村の人はいつも面白がって「ひ孫のことまでも、まだ面倒見なきゃいけないのかい?」とからかった。

曾祖父は恥ずかしそうに笑ってくちごもり「この小さな足跡を見に来たのさ、肥った・・・」。曾祖父は私の足跡を辿りながら学校までやって来たのだった。冬になり雪が降ると、曾祖父は必ず早く起きて私のために道を掃

いてくれたものだ、家の門から学校までずっと。高校に合格し、10幾つにもなった人間が、まだ曾祖父に送ってもらわなければならないとは思もしなかった。

遠回りをして行くうちに、足下の道は黒々とした平らな幅の広い道になっていた。私達の乗った車はとて大きな車輛だったが、私と曾祖父を除くと他には運転手と役場の司書しか乗っていなかった。車の中は寒々とし、車の外はそぼ降る雨でぼんやりとしていた。道の両側の高い青緑色の楊柳が一行、一行と後ろへ倒れてゆく。遠くの黛青(濃い青)色の山々がまるで羽を伸ばしているかのようにフワッと私達の方へ飛んでくる。

曾祖父は緊張して口を堅く閉じ、一言も話をしない。しかし私には曾祖父が内心誇らしく、また些か興奮しているのがわかった。案の定、車が五門楼を過ぎると、曾祖父は饒舌になってきた。いつときすると私に陽面に着いたと言い、またしばらくすると龍門溝にやって来たと教えてくれた。若い頃、曾祖父が出稼ぎに行くたびに通った幾筋もの道。大昔、周の時代に天子が諸侯を試して狼煙を上げた時、最も高く、勢いよく上げた烽火台……。

旧県を少し過ぎると突然大きな河が目の前に現れた。ゆったりとした河床、平で広々とし、向こう岸まで目が届かない；ゆるやかに流れる水：まるで一条の黄褐色の緞子の帯のようであり、靄のような細かい雨の中では一片の煙のような雲かともおもえる。「雲雲、これが黄河だ、河のあちは陝西省、向こうは内蒙古……」曾祖父は興奮気味に私に教えた。車は黄河に沿って走った。河の面にはポツンポツンと小舟が浮かび、木の葉のようでもあった。河の水は溢れ出て道路にまで達しており、車は水の浅いところをゆっくりと滑るように通って行った。廣大で果てのない黄河の水は私達の足下からまっすぐに対岸の遠い山に連なり、そして遠い山の峰は天まで届かんばかりであった。

私達が車を降りた時にはもう正午ちかくになっていた。人に尋ねてやっと私達が巡鎮にそう遠くない7、8里のところまで来ていることを知った。雨はすでに止み、アスファルトの道路はぐっしょりと濡れていた。私と曾祖父は荷物を背負い、一步一步巡鎮に向って行った。私は小さな包みを背負い、手には洗面器や食器などを詰めた大きな網袋を下げている。曾祖父は布団包みを背負った。歩き始めの頃は、曾祖父はまだ落ち着いた早い足取りで歩いていた。私は一生懸命歩いてやっとならぬところまで歩いたのだ。

やがてだんだんと曾祖父の歩みは緩慢になってきた。

なんといっても80才の老人である。布団包みの中には毛布や、敷布団、掛け布団ばかりでなく、替えの衣類や、携帯食料、それにたくさんの本まで、全部で6～70斤(30～35kg)はあったのだろうか。布団包みはだんだんと弛んできて下へずり落ちていった。曾祖父は歩いては止まり、歩いては止まりしながら布団包みを揺すりあげていったが、布団包みを結わえている縄の端は地面を引きずっていた。わたしはといえばもうとっくに動けなくなっていた。

いつも山道を歩くときには8里や10里ぐらいは飛び跳ねるように歩いていたものだが、その日真っ平らで広い舗装道路に行くことは、行けば行くほど先が遠く感じられ、歩けば歩くほど疲れるものだった。私はもう腰をおろして休みたかった。しかし、曾祖父はかえってゆっくりと一步一步前へ進んで行き、一休みしようなどとは考えもしなかったようだ。私は仕方なくその後ろをついて行った。私の目の前にはただ小山のような布団包みと前になり後ろになる曾祖父の両脚だけがあった。

ついに巡鎮中学の門が見えてきた。門の前には小さな白い橋がかかり、橋を渡ろうとした私と曾祖父は運動場で体操をしていた学生達に取り囲まれた。曾祖父は力を振り絞って前へ進もうとし、私はその後ろで、もう落ちんばかりになっていた布団包みを支えていた。学生達もその後ろについてきた。まっすぐに教務課の入り口に着くと、曾祖父はやっと布団包みを下ろした。曾祖父は汗を吹きながら周りを囲んでいる学生達に言った：「私は今80才だ、これは私のひ孫の……」やや自慢げな表情であった。

その夜、曾祖父は学生寮に泊まった。私達の宿舎は全員15、6才の女子で、皆、曾祖父を姥姥と呼び親切にしてくれた。その翌日朝早く、曾祖父が起きだして持参した食べ物を食べ、帰り支度をしていると、同室の王素娥があからさまに不機嫌な態度を示した。彼女によると、昨夜は曾祖父のいびきと部屋にたちこめた田舎の年寄りの汗臭さなどで一睡も出来なかったのだそうだ。彼女は曲峪の出身で、自分ではいくらか都会人とも思っていたのだろう。私は始めから終わりまで一言も口をきかなかった。救われたのは、曾祖父の耳が遠く、彼女が誰を罵っていたのかよく聞こえなかったことだった。

その日、曾祖父はひたすら歩いて戻ったのだ。100里もの道のりを、丸々一日かかって。家にやっとならぬところは夜もだいたい更けたころだった。

(岩田温子訳)

この文章は、2000年2月号に掲載されたものです。

バス旅行 — 前編

スリランカでは親戚や友人同士でバスを借りて旅行に出かける事がよくあります。カタラガマ詣での様に一族郎党が数日かけて泊りがけで出かける大掛かりなものから、山間部の人々が海岸に日帰りピクニックに出かけたり、逆に海辺の人が山間部に川遊びに出かけたり様々なバス旅行をします。カタラガマはスリランカで一番有名な聖地で昔の「お伊勢詣で」のような感じでしょうか。

今回は同僚でもある友人のマンチャナイケ(通称マンちゃん)の親戚一同約50名と行った川遊びツアーの話をしようと思います。

誘いは突然で、水曜日の朝に「今週末は暇か? ピクニックに行かないか?」といった調子だったので近場へのピクニックだろうと考えて気軽に参加しました。ところが、後で聞いた話ではこのツアーは年に一度の恒例行事で、マンちゃんは数ヶ月前から親戚一同のスケジュール調整と行き先の希望を聞いて、仕事の合い間というよりは上司の目を盗んで、これをメインワークとして段取りしたものだそうです。

実は上司とは僕の事で、これを悪びれずに言っちゃうところがスリランカ人気質でしょうか。スリランカでは、このような旅行の幹事役を仰せつかるのは大変な事で、この仕事を任されるのは親戚間で立派な男性と認められ、ある種のステータスになるのだそうで、マンちゃんも鼻高々でした。

特に今回は一族史上初めて外国人(僕の事です)を招待したので余計に鼻が高かったようです。外国人とはいっても川遊びだと聞いていたので、くたびれたアロハに短パン・ビーチサンダルの格好で集合場所に行くと、他の参加者は「よそ行きの晴れ姿」だったのには驚きました。目的地に着いたら着替えて、思いっきり遊び、食べ、歌い、踊り、帰り際に水浴をして汗をながして、再びよそ行きに着替えるのがスリランカ流のようです。スリランカ人が清潔好きなのを忘れた僕は、皆と一緒に水浴をしたものの汗臭いアロハを再び着る羽目になり、スリランカ流の方がよっぽど気持ちよく旅が出来る事を知りました。

さて、バス旅行の出発はコロンボ郊外のマハラガマからでした。集合時間より少し早めにハイレベルロード(国道4号線)のマハラガマ交差点に行ってみると、マンちゃんの姿は見え、4,5人の老人がたむろしながら、短パン姿の僕の方を胡散臭げに見ています。

スリランカ人が集合時間より早く来る事は稀なのですが、話をしてみるとこの老人たちはマンちゃん一族の長

老達で、マンちゃんのお目付け役としてかなり前からこの場所に来ていたそうです。この老人達は英国植民地時代を経験しているので実に優雅なクイズイングリッシュで話をするので、ブローケンイングリッシュのこちらが恥ずかしくなります。

集合時間になっても、この老人達と僕以外には人は集まらず、マンちゃんもまだ姿を表しません。30分ぐらい過ぎた頃から参加者が集まり始めましたが、予定していた人数の半分もいません。こんな事はスリランカでは至極あたり前のことで、誰も文句も言わないどころか近くの食堂にお茶を飲みに行ったりして、折角集まったのにどんどん人数が減ってバラバラになってしまいました。

集合時間を1時間ぐらい過ぎた頃に漸くバスがやってきました。バスにはマンちゃんの他に一族の若者達が乗り込んでいました。聞けば、昨夜から徹夜で今日のためのご馳走を作っていたそうで、このご馳走を積み込んだりして遅くなったようです。この遅刻でマンちゃんはお目付け役の老人達からかなり絞られていた事は言うまでもありません。

余談ですが今回借りたバスは、普段はコロンボとゴールを往復している民間の路線バスだったので、バス停を通過する毎に待っている人が手を上げて止めようとしたり、スリランカではよく見かける光景ですが動いているバスにお客さんが飛び乗ってきたり、飛び乗ってきたお客を追い出す為に交わすお客と男達の遣り取り、それを囃し立てる女性達と大騒ぎで面白かったです。

バスはやっと来ましたが、集合場所に一旦は来たものの何処かへ行ってしまった人、まだ来ていない人がいて、なかなか出発できません。その場にいた人達が手分けをして連絡をしたり、近所の食堂を探したり、せっかく戻った人が再び何処かへ消えたりと、なんとか2時間遅れで出発する事ができました。なんだがちりぢりばらばらに逃げ廻る羊と追い立てるボーダーコリー(牧羊犬)を見ている様です。僕もスリランカ人の時間感覚には慣れていますが、集合時間を1時間過ぎてはまだ自宅で支度をしている人、2時間遅れて来た人に対しても非難がましい事は言わずに何事も無かったかのように迎え入れる姿には驚きました。

僕は飛び入り参加をさせてもらったのでビールとウィスキーを差し入れました。このせいか、直ぐに皆に受け入れてもらう事が出来た上に、お酒を差し入れた事でちょっと面白い事を観察する事ができました。

スリランカでは昼間からお酒を飲むという行為は一般的ではありません。でも世界中のどこの国にいても同じ様な物だと思いますが、男達は目の前にお酒があると昼間でも飲みたくてウズウズし始めます。特にバス旅行という楽しい事の最中なので我慢できるわけがありません。

ところが、女性達特に奥方達は亭主が飲もうとすると睨みつけるだけでなく、かなり厳しい口調で何事か怒鳴りつけます。シンハラ語なので何を言ったのかは判りませんが、周囲の奥方達にも同意を求め、怒鳴った後で大

笑いをしています。長老達とて同様に、男達の中での権威もどこかにいってしまい、奥方の目を盗んではチビチビとウィスキーを飲んで顔を赤くしては怒鳴られています。

何だか、スリランカの家の中での男性の立場がわかったような気がします。更に驚いた事に若い女性達も母親の目を盗んで、少量だけですけれどビールを飲んで酔っ払っていました。これって、スリランカの一般家庭の日常では有り得ない事です。

車中及び川遊びについては次回書かせて頂きます。

ラオス山の民・モン族の美しい刺繍 *シヴィライ村の女性たちのハンディクラフト

夢広場(11月4日、町田浄運寺)で販売!!

それはとても丁寧に刺された美しいクロスステッチの刺繍です。

2005年の5月、'わんりい'の活動の一環として「ラオスの山の子ども文庫基金」を立ち上げた安井清子さんに協力して、“針と糸の語りベラオス・山の民モンの子どもたちの刺繍絵本展”を開催しました。その時に初めて、民族の伝統的手仕事として衣服などにクロスステッチ刺繍を施してきた、モン族の女性たちの美しいクラフトに出会いました。丁寧に一針一針びっしりとクロスステッチで埋め尽くされた刺繍作品、どれもこれも甲乙つけがたい出来栄で、会期中受付に坐っては一つ一つ手にとって時間を忘れていました。

エスニックグッズのお店などでクロスステッチの作品を見かけることはあるのですが、今回、夢広場で販売の作品は、子どもたちの図書館建設でしばしばラオスを訪れ滞在の安井清子さんが一つ一つ吟味し、厳選して持参したものです。シヴィライ村の女性たちがきちっと丁寧に心を込めて刺した刺繍作品は、シヴィライ村ブランドとでも名付けたい、針を刺すモン族の女性

の息づかいを感じるような素晴らしい出来栄です。

是非、夢広場で手にとってご覧下さい。購入されればきっといつまでもあなたの手元で愛される使用されるのではないかと思います。(田井)



田井が使用中のポシェット

【モン族の刺繍作品について】 安井清子

モン族は、山を自由に歩き回り自然と共に暮して来た人々です。

しかし、インドシナ戦争の影響を受けて、多くの人々が難民となり、隣の国、タイの難民キャンプで長い間暮していました。彼らは畑を作ることも何をすることも許されない不自由な難民暮らしの中でも、自分たちの民族に伝えられてきた美しい刺繍を続けていました。

1993年に難民キャンプが閉鎖になり、彼らはラオスに帰還しました。そして作った村が、シヴィライ村です。シヴィライ村は、ラオスの首都、ヴィエンチャンから車で3時間ほど離れたところにあります。故国での再出発。山を開いて畑を作り、ぎりぎりの自給自足の生活です。でも、農地が足りないので実際には食べる米も十分には獲れず、現金収入もありません。そこで、村の女性たちは畑仕事の合間に一生懸命刺繍を作っています。刺繍が、不足した食料を買うお金、ノート代、そして、薬代となっています。小さい女の子もお母さんの隣に坐って教わりながら、一針一針、村のみんなが刺繍のハンディクラフトを作るようになりました。

女性たちは、生活の為に必死で作っているのですが、ある時、一人のお母さんが言いました。

「私たちの刺繍はとてもきれいよね。私は、自分の刺繍が好きよ。以前より上手になったと思うわ」。

私はそれを聞いて、刺繍が女性たちの創作の場になっていて、彼女たちが自分たちが作り出すものに自信と誇りを感じていることを知り、とても嬉しかったです。女性たちが、自分たちが作り出すもので生活を支える力となって欲しいと思います。是非、そんなことを心の片隅に思いながら、モン族の女性たちの刺繍のクラフトを使っていたら嬉しいです。

‘わんりい’15周年記念コンサート

天女たちの華麗な楽曲「二胡、中国琵琶、揚琴と笙の演奏会」

～ 中国民族音楽演奏の精鋭たちが奏でる魅惑の中国民族音楽14曲 ～

出演：チェンタンハオ 銭騰浩 (中国笙) リュウフォン 劉鋒 (二胡) ウェイウェイ ウェイウェイ (中国琵琶) チャンイエンジュアン 成燕娟 (揚琴)

2007年11月30日(金) 19:00開演(18:30開場)

於：町田市民フォーラム・ホール(町田市原町田4-9-8)

JR横浜線町田駅ターミナル口・徒歩3分 小田急線町田駅南口・徒歩7分)

参加費：2000円(188席 全席自由席)

会員券購入方法

郵便振替口座‘わんりい’(00180-5-134011)へ、人数分の会費をお振替下さい。
振替確認後、会員券をお送りします。

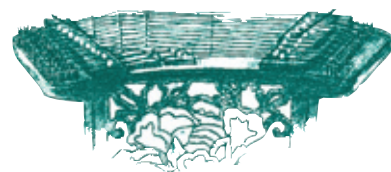
鈴木楽器本店(小田急線町田駅南口前)で直接購入できます。☎042-726-9811

問合せ&申込み：☎042-734-5100 ‘わんりい’

主催：日中文化交流市民サークル‘わんりい’

後援：中国大使館・文化部 (財)日中友好会館 (社)日中友好協会

協力：NPO法人ネパール・ミカの会/NPO法人アジア草の根交友会/
STEP by STEP平和/日本スリランカ文化交流協会



演奏会ではどんな曲が演奏されるの？

日本人なら誰でもきっと^{めいてい}酔っ払ってしまう！ 二胡で演奏の「荒城の月」！！

その他、中国民族音楽演奏の名手が奏でる数々の中国民族音楽の名曲の響きがあなただの心をしびれさせ、コンサートの後は真っ直ぐ家に帰るのがもったいなくなるかも知れません。

▶コンサート演奏予定曲(変更の可能性あります)

1. 花好月圆(合奏)

お祭の賑やかな情景が目には浮かぶ。現代中国民族楽器合奏曲。

2. 彩雲追月(合奏)

中国伝統音階で構成された優雅なメロディを軽やかなリズムで演奏。日本では「南の花嫁さん」という題名で親しまれたが、原曲は中国。

3. 江河水(二胡独奏)

中国秦の時代の物語。万里の長城の荷役として、役人に無理矢理に夫を連れ去られ、間もなく夫他界の知らせを聞いた妻は…。二胡の名曲。

4. 十面埋伏(琵琶独奏)

琵琶の古曲で、隋の時代からあったといわれる名曲。項羽と劉邦の最後の戦い「垓下の戦い」を描く。布陣、軍楽、埋伏、小戦、大戦、項羽の自殺、漢の勝利等に分けられてドラマティックに演奏される。(十面埋伏についての詳細が次ページにあります)

5. 節日の天山(揚琴独奏)

中国新疆ウィグル族の音楽に基づくオリジナル曲。優雅で華麗なメロディー、そして多彩なリズムの変化で、天山山脈の下、ウィグルの人々が歌い踊り、熱烈に祭を慶ぶ気持ちを表現する。

6. 鳳凰展翅(笙独奏)

一羽の鳳凰が翼を広げ自由に大空を舞う。美しい両翼を広げ、煌めく長尾を打ち振るい軽やかに飛翔し踊る。優雅で豪壮な笙独奏曲として親しまれている。

7. 瑶族舞曲(二胡、琵琶、揚琴三重奏)

中国民族音楽の代表的作品で、様々な楽器編成で演奏される。瑶族音楽の独特な音階とリズムが楽しい。

8. 春江花月夜(合奏)

琵琶の有名な古曲「夕陽簫鼓」を編曲し、合奏曲としてアンサンブルや琵琶、簫二重奏曲として演奏される。春の夜、全ての風景が溶け合う魅惑的な夜の情景が眼前に広がる。

9. 歡樂歌(合奏)

中国江南地方の民間伝承音楽。江南地方の豊かな水郷の、優しく穏やかな風景と、そこで暮す人々の楽しく充実した日々が合奏で奏でられます。江南絲竹の代表的な曲の一つ。(江南絲竹については次ページを参照下さい)

10. 藍色水郷賦(笙独奏)

緑溢れる江南地方の閑静な田園風景。一枚の布が織られ、藍色模様の布に染められ、日常着として村人たちは身につける。江南地方の懐かしい故郷の風景が郷愁を誘う。

11. 荒城の月(二胡独奏)

古城の上に煌々と照る春の月。二胡の冴えた響きで日本人の感性を呼び覚ますようだ。

12. 歩歩高(合奏)

明快で変化の多いリズム、起伏に富んだメロディが特徴で活力に溢れ楽しい広東音楽。

13. 日本の曲メドレー

夏の思い出(中田喜直)・涙そうそう(BEGIN)・浜辺の歌(成田為三)

14. 賽馬(合奏)

モンゴルの若者が草原に集う「ナーダムの祭」では、数千頭の蒙古馬が大草原を疾駆する。

中国民族楽器 — 華麗な、鍛えられた音色

‘わんりい’の会ではこれまでの活動の中で、紀元前に遡る楽器から現代にいたるさまざまな中国民族楽器の演奏と音色を楽しみ味わってきました。知れば知るほど、聴けば聴くほどに中国民族音楽の奥の深さに驚くばかりです。

中国の広大な国土にはさまざまな民族が住み、独自の音楽と楽器を創造し、4000年にわたる悠久の歴史の中でお互いに影響しあって今日あるような代表的な中国民族音楽、民族楽器として集大成してきたのでしょう。けだし、人類がいれば歌があり楽器があるという、人類と音楽の切っても切れない深い関係が中国の民族楽器の多様さの中に見えるようです。

ところで奈良時代、日本は積極的に大陸の文化を取り入れるようになり、正倉院には現在の中国民族楽器原型ともいえる渡来楽器が多数収蔵されています。面白いことに、日本に渡来してきたそれらの楽器はあまり改良を加えられることもなく、宮廷雅楽などで今もって当時のままに演奏されていますが、一方、中国では科学技術の発展に伴い楽器と演奏技術に改善と改良を重ね、姿は似ていても音色は全く異なる楽器へと改造を加えられてきたことです。

正倉院に収蔵されている中国からの渡来楽器に、今は既に中国では幻の楽器になってしまったものがそのまま保存されていることを知った中国の皆さんが、愕き感動し、復元して演奏されるのを聴かれた方もあるのではないのでしょうか。

話が余談にそれましたが、進取の気性に富んだ中国の皆さんが改良と改善を進めてきた民族楽器は、それぞれに人々の心の機微を余すことなく表現できる優れた楽器となり、時には華やかに、時には深い音色で聴くものの心を楽しませ揺さぶります。

今回の‘わんりい’15周年記念コンサートでは、現在よく演奏される中国民族楽器のうち、二胡、琵琶、揚琴と笙が独奏や合奏で、それぞれの楽器の素晴らしい音色が披露されます。(田井)

「歓楽歌」— 気持ちは浮き立つ「江南絲竹」という演奏形式

中国民族音楽の演奏会でよく演奏される明るい華やかな合奏曲があり、聴く人々の気持ちは自然とうきうきして来ます。これは江南地方の、江南絲竹と呼ばれる演奏形式で、結婚式などお目出度い折に楽隊が街に繰り出して演奏されたりします。今回の演奏会では「歓楽歌」が「江南絲竹」です。

江南絲竹の絲竹の絲は弦楽器を表し、竹は笙や簫のような竹管楽器を表しています。もともとの演奏形式は、琵琶・二胡・揚琴・三弦・笛・笙・簫・鼓・板・木魚・鈴など、弦楽器と竹管楽器が合わさったものでした。楽隊の編成は融通がきき、一竹(簫)一絲(二胡)から比較的大きな構成の楽隊での演奏が可能です。

演奏は、骨組みとなる音に、各々の楽器の音色を生かした装飾を加え、曲調やリズムを相互に絡ませ、補い合い、繰り返し演奏します。江南絲竹の多くの楽曲は、民間に起こり、冠婚葬祭や神社の縁日などに関わっていますが、中には伝統音楽を改編したものも含まれています。その曲調は、『花(華やか) 細(繊細) 軽(軽快) 小(小型) 活(活発)』という伝統的な風格と特色があり、軽快で流暢、爽やかで活発です。

江南絲竹の有名な曲として『薰風曲』『歓楽歌』『三六』『雲慶』『行街』『慢三六』『慢六板』『四合如意』など「八大曲」があります。(中国音楽小辞典より 銭騰浩)

琵琶の古典的名曲・十面埋伏 (はおうべっき 霸王別姫)

中国を統一した秦の始皇帝が亡くなると天下は再び戦火に覆われ、覇を争う楚国の項羽と漢王朝を打ち立てた劉邦との戦はいつまでも決着の付かない泥沼のような戦になりました。しかし、最後の「垓下の戦」で、猛将として名を轟かせていた項羽は敗れます。項羽はその時31歳だったといわれています。「垓下の戦」は語り継がれ「四面楚歌」などの言葉を生み出しました。

京劇でも霸王・項羽と項羽にかしづく、美しく、健気な虞姫との悲劇的な別れを描いた演目「霸王別姫」として繰り返し上演されています。既に旧聞になっていますが、映画「さらば我が愛」でもこの京劇の演目が下敷きになっていました。

琵琶曲「十面埋伏」隋の時代からあったといわれる琵琶の古曲ですが、この「垓下の戦」を描いた名曲として有名です。布陣、軍隊、埋伏(伏兵を置く)、小戦、大戦、項羽の自殺、漢の勝利などに分けられ、時に激しくかき鳴らし、時に静かに心の奥深くを覗くような調べで悲劇の物語を語る起伏に富んだ大曲です。

【今回のコンサートで演奏の中国民族楽器】

●笙(ジョン)



3000年前、中国大陸で生まれた楽器で、紀元前1401～1122の殷の時代には既に笙についての記載があります。現在知られている実物の最も古いものは、戦国春秋時代の墳墓・「曾侯乙の墓」(註)から発見されました。

ふくべ(瓢箪の一種)を風箱として長短13本から36本の竹の管を差込み、下端に金属の箱をつけた管楽器。それぞれの竹の管には穴が開いており、その穴をふさいで音階を変えます。冬には金属の部分にお湯を入れて温度が下がらないようにして音を出しやすくします。また、息を吸ってもはいても音がでます。

日本には唐の時代に伝来し、当時の中国の笙と同じ笙が、雅楽の中で用いられていますが、現在、中国で使用されている笙は、改良されて唐代のものとは異なっており、音量も比較的大きく合奏、独奏共に幅広く用いられ、音色は鳳凰の鳴き声といわれています。

●二胡(アルフー)

唐時代に西域から伝わった楽器で、黒檀やマホガニー等の堅い木の胴に蛇の皮を張り、馬の尾の毛を張った竹製の弓を二本の弦の間に挟んで弾きます。

もともとは民間のみで演奏され、宮廷や貴族の屋敷で用いられることはなく、専ら、戯曲の伴奏楽器や江南絲竹楽隊(15P参照)の主奏楽器として使用されていました。

20世紀になって独特の音色が注目されるようになり、単独で演奏できる楽器に作り変えられました。演奏技術も向上して地位も上がり、今では中国の代表的な民族楽器と見なされています。

二胡の楽器には、京劇に使われる京胡や広東音楽の伴奏に使用される高胡(二胡よりも音が高い)などがあります。日本では胡弓の名で知られています。

●琵琶(ピーパー)

紀元前、3世紀に既に中国には長い柄と皮張りの丸い共鳴箱を持つ琵琶に似た楽器がありましたが、現在の琵琶の原型は漢代になってできあがりました。現在の琵琶は、4本のスチールの弦を持ち、31フレットあり、演奏は繊細かつ俊敏な動きが求められます。琵琶は、日本では撥での演奏を思い



浮かべますので、初めて中国琵琶の演奏を聴く日本人は、全く異質の音色に驚くことと思います。

中国琵琶の演奏は、実は撥を使わず、手の指に人工の5本の爪をつけ、琵琶を立ててかき鳴らすように演奏します。デリケートな演奏が可能であり、同時に力強いハイテンポの演奏も可能で表現力抜群の楽器といえます。

●揚琴(ヤンチン)

10世紀頃、イランで生まれた楽器で、西に伝わったものがピアノのルーツとなり、中国へは明代にシルクロードを



経て伝来しました。揚琴の共鳴部は木製で、平たい台形をしています。上部に135本の弦を張り、細い二本の竹の棒で叩いて演奏しますが、その音色は澄んで、明るく、華やかで、しかも繊細で豊かな響きがあります。音量もあり音域も広く、愛好者の多い楽器です。

中国に渡ってすでに400年の歴史がありますが、中国の代表的な民族楽器の中では最も新しい楽器の一つです。

(註) そうこういつ 曾侯乙の墓 (紀元前433年)

1978年2月、湖北省随州市郊外の工事現場で、東西長さ21メートル、南北広さ16メートルの古墓が発掘され、墓からは世界を驚かせる文物が多数出土し注目を浴びました。

この墓は曾侯乙の侯「乙」が葬られていたことから「曾侯乙の墓」と呼ばれていますが、中から出土した16000点に及ぶ青銅器、兵器、車馬器具、金器、玉製の器具、竹製の器具などに混ざって実にさまざまな楽器が発見され、当時、使用されていた楽器を知ると共に楽器変遷の過程を知る手がかりを与えてくれました。

出土品の中で最も注目されたのは、青銅器で作られた65個の鐘が横木にセットされ、使用された当時のままの姿で発見されたことで、最も大きな鐘は153.4cm、その重量は2.5トンを超えていました。それは編鐘と呼ばれる楽器で、祭祀などの折、地位と権力の誇示の為に使用されたものと見なされています。

曾侯乙の墓から出土した楽器その他は中国湖北博物館に収蔵されています。館内特別演奏ホールでは複製されたこの巨大な編鐘が演奏され、同博物館の目玉となっているとのことです。昭和女子大学人見記念講堂ロビーにも復元された編鐘が置かれ、来場者を驚かせています。

●コンサート関連のカットは天女を除いて下山道郎(わんりい'会員)さんの作品です。

- 9月定例会 10月18日(木) 田井宅 13:30～
- 10月号発送日 10月29日(月) 田井宅 13:30～

【お出掛けください】

第10回町田発国際ボランティア祭 ■ **2007夢広場** ■ 参加:無料
 2006年11月4日(日) 10:00~16:00 ~ 今年のテーマ「共生・私たちの地球」 ~
 福祉団体の参加を含めた30数団体が「共生」をテーマに下記3会場に集う!!

● **本会場:町の駅「ぼっぼ町田」**

JR横浜線ルミネ側改札口徒歩3分/小田急線町田駅南口徒歩5分
 町田東急デパート裏109ファッションビル裏通り

エスニック料理いっぱい! 民族芸能いっぱい!

- * 'わんりい'はモンゴル風味のエスニック焼鶏販売!
 とっても美味しい炭火焼。焼鶏で交流しよう!

● **第二会場:浄運寺境内**

民族芸能とエスニックグッズのお縁日と民族芸能上演
 楽しい掘り出し物を見つけよう!!

- * ラオス山の子ども文庫が出版
 シヴィライ村ブランドの美しい刺繍作品は見るだけでも
 楽しい! 身につければもっと楽しい!!

● **街かどギャラリー(10/27~11/4)** 原町田中央通り商店街/ぼっぼ町田の斜
 向かい

子どもたちの絵と夢がいっぱい/国際交流センターの各部会のパネル展示

- ▶ 主催:2006夢広場実行委員会 ▶ 共催:財団法人町田市文化・国際交流財団
- ▶ 協力:浄運寺/幸町商店会/原町田4丁目商店会



賑わうお祭会場 2006年夢広場

【浄運寺ステージプログラム】

- 10:35 ~ 10:55 ヴァイオリン演奏
- 10:55 ~ 11:25 万馬馬頭琴アンサンブル
- 11:25 ~ 11:40 ジュニアコーラス
- 12:00 ~ 12:30 ロック・バンド演奏
- 12:30 ~ 13:00 ロータスダンサーズ
- 13:00 ~ 14:00 ハワイアンダンス
- 14:00 ~ 14:30 カンボジア伝統舞踊
- 14:30 ~ 15:00 パリ伝統舞踊
- 15:00 ~ 15:30 アフリカン・パーカッション
- 15:30 ~ 16:00 ダンス



TOKYO 万馬馬頭琴アンサンブルの演奏



インドネシア・パリの踊り

【ぼっぼ町田ステージプログラム】

- 9:50 ~ 10:00 開会式
- 10:00 ~ 10:20 ヴァイオリン演奏
- 10:20 ~ 10:30 ジュニアコーラス
- 10:35 ~ 10:55 子どもたちの歌
- 10:55 ~ 10:25 ハワイアンダンス
- 11:25 ~ 11:45 手話ダンス
- 11:45 ~ 12:00 セレモニー
- 12:00 ~ 12:30 アフリカンパーカッション
- 12:30 ~ 12:50 馬頭琴アンサンブル演奏
- 12:50 ~ 13:10 パリ伝統舞踊
- 13:10 ~ 13:40 パーカッション
- 13:40 ~ 14:00 ダンス 14:00 ~ 14:20
- 14:00 ~ 15:00 ハワイアンダンス
- 15:00 ~ 15:30 民族楽器による歌と踊り
- 15:30 ~ 16:00 パフォーマンス



「ハローインターナショナルサロン」 — アフリカ地域交流会へどうぞ!!

2007年11月18日(日) 14:00~16:00 参加費:1000円(高校生以下無料)

於:さがみはら国際交流ラウンジA/B会議室

〒229-0033相模原市鹿沼台1-9-15 プロミティふちのべビル2F/JR横浜線淵野辺駅下車徒歩5分

主催:さがみはら国際交流ラウンジ 問合せ: ☎042-750-4150

アフリカと関わる活動をしているアフリカンコネクション等3団体が自分たちの活動を紹介します。アフリカンコネクションはケニアの紹介と現在行っているマイクロファイナンス(小規模融資活動)の様子など紹介。歌と踊りを楽しんだり、ティータイムでケニアの紅茶を味わいます。

